

参加者は「保守」 怒りや違和感 堂々と表明したい 自分たちの社会だ そんな確信と希望 拡散するのが役割

政権批判デモの主催メンバー 高橋若木さん

原発再稼働。集団的自衛権の行使容認。安倍政権が進めるこうした政策に、「1強多弱」の国会はブレーキ役どころか十分な論議の場さえつくれずにいる。そんな政治状況下で、特定の党派や組織よらない人たちが新しいスタイルのデモを始めた。仕掛け人の一人、高橋若木さんに、デモが持つ意味とこの国の民主主義について聞いた。

——さかのほること 2 カ月前、集団的自衛権の閣議決定に抗議する首相官邸前デモを仕掛けたのは、みなさんですね。「東京デモクラシークルー」。どんな人の集まりですか？

「3・11 後の脱原発デモや、ヘイトスピーチに対抗するカウンター活動、特定秘密保護法反対デモなどの現場で知り合った面々によるゆるやかつながりです。20 ～ 40 代の普通のサラリーマンのほか、デザイナーや編集者、アーティスト……。個人的に仲がいいとというより、ネットで、連絡しあってデモをつくりあげる『協力者』という感じです」

——特定の組織や党派によらずに大規模デモを実行するには、大変な時間と労力がかかるでしょう。お金にもならないのに、なぜわざわざそんな面倒なことをするのでですか。

「自分たちが暮らしてきた、日本社会が好きだからです。安倍さんが言う『戦後レジームからの脱却』は要は革命。私たちは、そんな安倍さんから、「戦後日本の民主主義を保守したい」

「3・11 以前、日本のデモのほとんどは、社会の『外側』から、社会を糾弾したり、嘆いたりしがちだったと思います。少数の『目覚めた』弱者による、多数派への抵抗。こわばった悲壮感が漂い、デモから人を遠ざけていたと思います」

「私たちは、自らを社会の『内側』をつくっている市民であり、主権者という強者だと思っています。狭量で短見で主権者を見下すような無礼な政治家は、叱らないといけない。おういう強者の感覚に根差したデモを自分たちでつくろうと。強者の余裕は悲壮感を退けます。ユーモアがありながらも容赦のない、クールな抗議を目指しています」



——権力者は、選挙で選ばれた我々へのデモやシュプレヒコールこそ無礼だ、と思っているのでは。

「それは代議制民主主義に対する無知ですね。選挙で『代表』を選んだからといって、全権委任しているわけではなく主権は、選挙後も変わらず私たちの方にあります。そのことを忘れていたら、デモという非暴力的な手段で圧力をかけるのは当然でしょう。自民党は先日、国会周辺でのデモの規制を検討しようとしていましたね。『うるさくて仕事にならない』からだそうです、その仕事を任せているのは主権者です。ちゃんと仕事をしてくれればわざわざ抗議に行く必要はない。迷惑をかけられているのは私たちの方です」

「私たちは、何か特定の『善』を社会に広めたくてデモをしているわけではありません。何を善と思うかは人それぞれです。だからこそ、特定の善を他者に押しついたり、押しつけられたりしてはならない。支配しないし、支配されない。そのようなフェアな関係を守るため枠組みを定めているのが憲法です」

「安倍政権は集団的自衛権の行使容認という、本来は憲法改正しなければ出来ないことを、閣議決定だけで決めてしまった。戦後日本が守ってきた、最低限フェアな社会であるための枠組みを壊すもので『支配願望』の表れだと思います。もはや個別政策の当否にとどまらない、政権を担う資格があるかという問題です。だから首相官邸前のデモは『集団的自衛権の行使容認反対』のコールが、いつしか安倍さんの退陣を求める声に収斂されていきました」

——しかし、名指しのコールは「デモは怖い」というイメージを増幅させているのではないですか。

「抗議型の社会運動は、『指をさす』ことから始まります。『戦争をやめよう』とやわらかく呼びかけても、『軍国主義の始まりだ』と訴えても、抗議の対象が漠然とじているので『世間』には伝わりません。すでにくすぶっている具体的な怒りや違和感があるのですから、それを社会に表出させることが必要です。そのためには、民主的な政治プロセスへの侮蔑を隠さない政治家は『敵』として指をさし、『辞めろ』と言う。民主主義は正しい『指さし』によって、求心力を回復します」

「怒りを可視化させることで、人々の無関心を揺さぶり、民主主義がつねに起動している社会にしたい。不公正なことをする政治家に対しては、怒っている人が多くいることを知らしめ、社会に対しては、怒った時は堂々と表明していいことを、目に見える形にしていきます」

——デモに効果はあるのでしょうか。訴えが届いたり、現政権がデモによって政策を修正したりすることもない。何かが変わったようには見えませんが。

「効果は確実にあります。自民党幹事長が『デモはテロ』と言ったり、政調会長がデモ規制を持ち出したりするのは、それぐらい嫌がっているからでしょう。『1強多弱』で国会が機能不全に陥る中、嫌がられる勢力がいることは大事です。そしてもう一つ、政治に無関心だと言われ続けてきた若い世代の参加者が増えているのも大きな変化です」



——現場で取材していると、「ケンポーをまもーれー」みたいなやや間延びした年長世代のシュプレヒコールが若者に引きずられてラップ調に変わっていきました。若い世代はなぜ動き出したのでしょうか。

「意外かもしれませんが、たぶん保守的だからでしょう。私たちより若い世代は、高度経済成長も、多幸感にあふれたバブル期の日本社会も知りません。経済的な繁栄を再びとっていないし、日本は没落したからはい上がるために抜本改革が必要だという年長世代の焦りもぴんとこない。大事にしているのは、今の日本社会にある自由であり平和であり多様性です。それを守りたい。そして何より率直です。かつての学生運動を知らないのだから、肩ひじを張らず、嫌なものは嫌だと普通の言葉ですんなり言える強みがあります。」

——その一方で、若い世代の「右傾化」も指摘されます。

「インターネットが普及し、人はインスタントな情報に刹那的に反応するようになります。良い悪いではなく、社会のインフラの変化です。集団自衛権では、普通の中高生や大学生がツイッターで『戦争嫌だ』『安倍ふざけんな』とつぶやいていました。『安倍』の漢字がことごとく間違っているんだけど、そういう直感的な怒りを大事なものとして拾っていくことをリベラルの側は怠ってきました。そこは右派がうまかった。中韓が悪い。サヨクが悪いと言いつつ、怒りや不満の感情をつかみ、拡大しました」

「若い人の多くは、ハードな労働環境の下、政治や社会の問題について思考する気力もその気力を支える社会に対する希望も奪われつつあります。問題を分析したり、社会を漠然と嘆いたりするだけの、リベラルの『お説教』に付き合っている暇はありません。私たちは広告的な発想も使って、正しい『指さし』で人々の感情をつかまえにいく。十分に巻き返せると思います」

——デモの前にデザイン性の高いプラカードが何種類もネットにアップされ、ツイッターでは「おしゃれしていかなきゃ」というつぶやきがありました。運動のカッコ良さを強調されているのも、戦略ですか。

「私たちの運動がスタイリッシュに見えるのは、渋谷や新宿でデートしているようなおしゃれな若者を含め、社会の、『内側』にいる人々が声を上げているからでしょう。政治に無関心な人たちの目に最初にとまるのは、主張の内容では運動のスタイルだと思います。デモは、民主主義を再起動させるためのプレゼンテーションです。旧来的な左翼の運動と映るのか、同世代のクールな人たちの運動と映るのか。この番は決定的に大きいと考えています」



——現実には、デモで政権を変えることはきわめて難しい。最後はやはり選挙ではないですか。

「デモに参加すら人たちは政治的関心が高いので、選挙のときには候補者の情報をチェックし、拡散し、もちろん投票にも行きます。投票とデモは民主主義の両輪。

デモが日常の光景になれば、そのような投票層の拡大につながります」

「国政選挙は、さまざまな問題をまとめて有権者に問うものですから、個別の政策についての民意が結果に反映されないことがあります。例えば世論調査では、脱原発は多数派でも、原発推進の自民党が勝ってしまう。だからこそ、選挙以外に政治に主権者の意思をインプットする回路が必要です。デモはその一つ。民主主義の基本装備です」

「選挙は大事ですが、20世紀のファイズムを代表するナチス政権は選挙で生まれたことも覚えておきたい。デモの究極の役割は、どんな政権ができてでも完全に押し込まれない。公正な社会の枠組みがボロボロにされないような政治文化をつくること。『これは自分たちの社会だ』という確信と『社会は変えられる』という希望をよみがえらせ、拡散することです」 (聞き手 論説委員 高橋純子)

3枚の写真へのキャプション「非暴力に徹したデモが、これほど継続しているのは世界的にも新しい。自信を持つべきです」 =時津剛撮影



(朝日新聞 2014年9月13日付) より